優秀賞

野鳥で繋がる絆と友情

東京都　東京都立大泉高等学校附属中学校一年　利根川　快斗

「鉄塔に何か止まっていますね。」
「あれはたぶんハヤブサやね。近くまで行ってみようか。」
期待に声を弾ませながら僕と一緒に早足で鉄塔に急いだこの〝鳥友達〟は、友達というにはおこがましいほど、僕より七十歳以上も年上の鳥見の師匠でもある。そして、この日の二人探鳥会は僕と彼の四年ぶりの再会の場であり、初めて知り合った日以来となる二度目の対面でもあった。
僕がこの人生の大先輩と出会ったのは、小学三年の時だ。その頃から野鳥に関心があった僕は、夏休みに大阪の祖母を訪れた際、淀川のヨシ原でのツバメのねぐら入り観察会に参加した。その会のリーダーを務めていたのが、野鳥観察歴四十年超の彼だったのだ。観察会の感想文を提出することから、彼とのやりとりが始まった。東京に戻ってからも、僕は近所で見た野鳥の絵を描いて送ったり、東西で見られる鳥の違いについて尋ねたりして、交流が深まっていった。次の春休みでの帰省で再会するのを楽しみにしていた矢先、コロナ禍の襲来によってその望みは断たれてしまった。
直接会えないまま、先が見通せない日々でも交流は続いた。思うように外出できない時期には彼が送ってくれた野鳥図鑑を読み込んだり、マスク着用を徹底して一人探鳥会をしてはメールで報告したり、彼の主催する野鳥の会の会誌に観察記録を寄稿したりした。自分の寄稿を多くの人に読んでもらえることで、淋しさは薄れ、野鳥というキーワードで繋がりあえていることに心が救われた。
こうして四年が過ぎ、中学生になったこの春、僕はようやく彼と再会を果たせた。二人で探鳥会をしようと予め相談をし、初めて出会ったあの淀川で、と場所も決まった。再会の直前までは少し緊張もあったが、
「いやぁ、大きくなったなぁ。」
という彼の第一声で、ただ嬉しさだけがこみあげてきた。ひたすら野鳥の話をしながら、探鳥地へ向かう。普段はなかなか姿を見られないシマアジやカワアイサなどの水鳥、ミサゴやハヤブサなどの猛禽類も多く観察でき、最終的には五十種以上もの野鳥と出会えた、想像以上に収穫の多い探鳥会となった。
「きっと、『よう淀川におかえり』って鳥たちが快斗くんに言ってるんやわ。」
と笑う彼の隣で、僕も笑顔になった。長かったトンネルを抜けてようやく再会できた鳥友達との、楽しく夢のような時間だった。
僕は、会えなかった時間、新幹線移動を要する距離、そして年齢差もこえて、友情は築けると確信した。気が滅入りそうな制限下の日々でも、即時にメールで思いを共有することができる現代で良かった。そして、彼と僕とを繋いでくれる野鳥たちの存在にも深く感謝している。野鳥を通じたこのかけがえのない友情を大切に、これからも鳥を見る楽しさを彼と分かち合いたい。